

愛知 奇聞 明治元一坊



前篇上



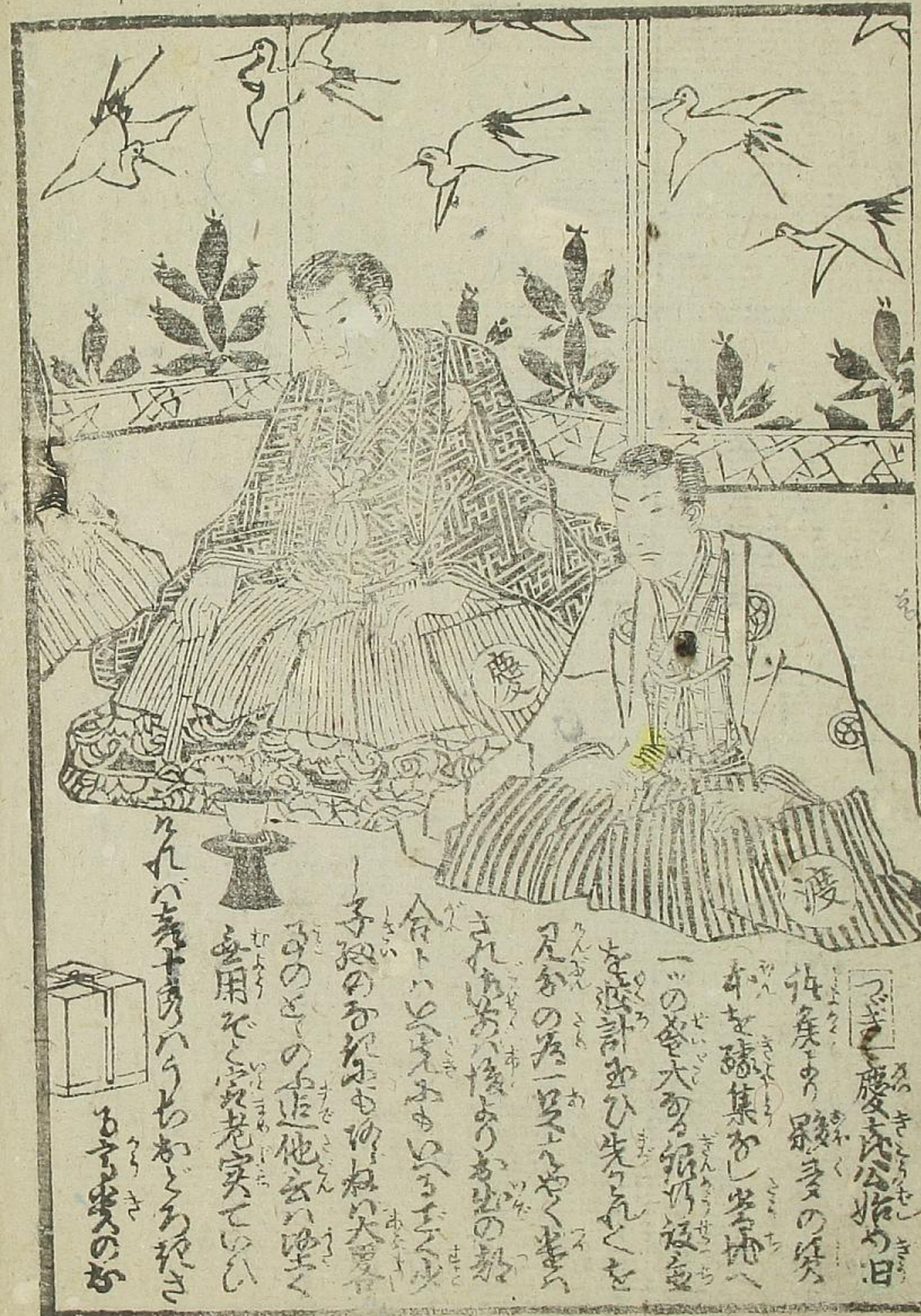
A 587
1

愛知 明治天一坊前編の序詞

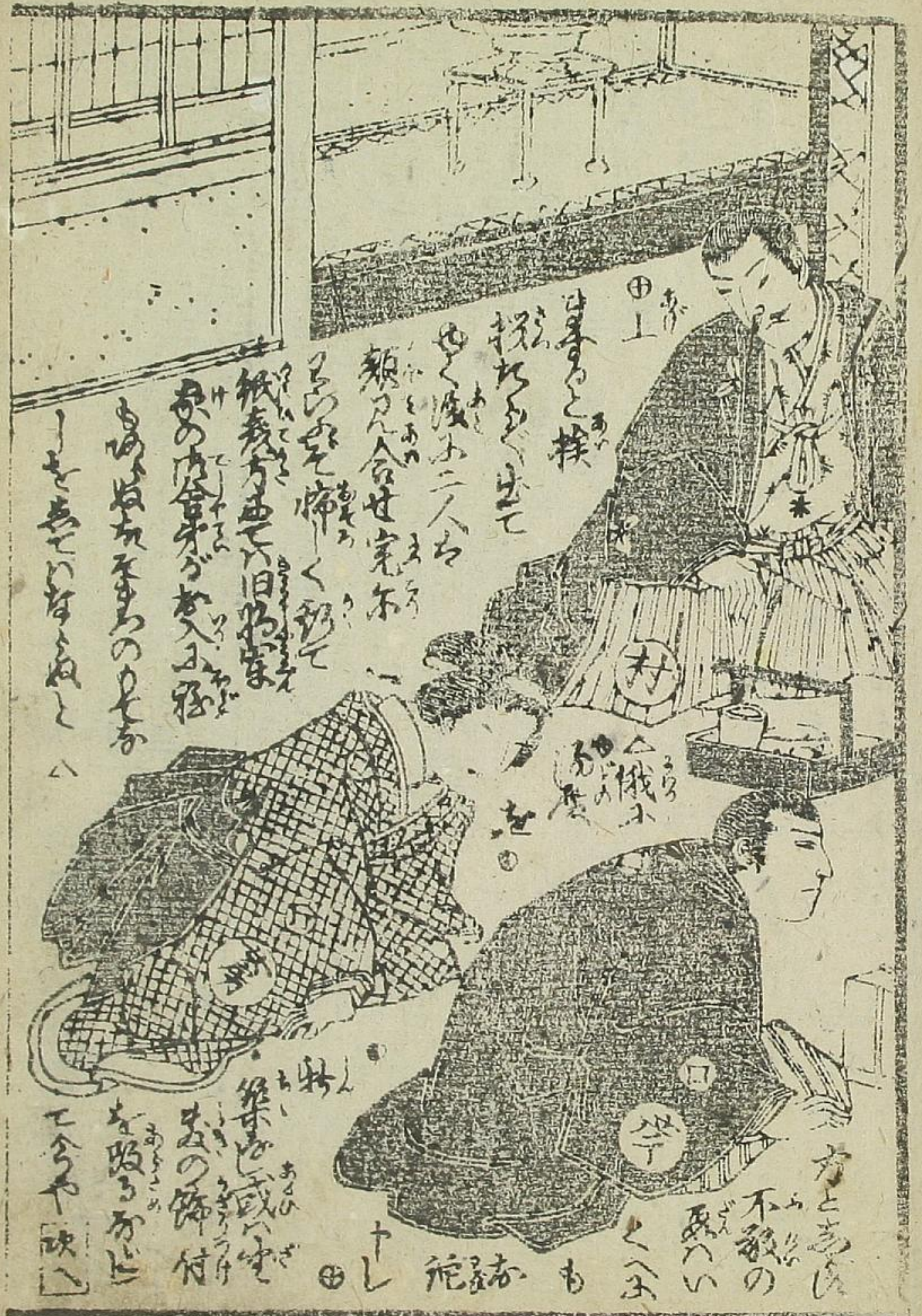
源と淀と名徳川の落流ありと傳りて天下を望む天一坊の筆お微
うそぬけく治すも聖代の法網を潜りたき葵の假紋付終り
末流の華族とるやあけ濡手で粟の五千圓を旅店の表二階
おまへへ貸借の取引も茶の湯のお茶を湛せ謀畧裏へ廻れハ
裏防子の造化精妙と舌座り幕外眼の引込際曲漢考を告
訴され乃昌愛れ裁判不白湖を黑白對決の世に珍しく此流を去村の
需お任せく迅速が揚と一夜渡忽卒の雪に綴り畢舞ぬ

明治十六年仲夏 物の本の作者 荅堂文京記

48-8453



慶長公始の日
 此疾より 疑まの終
 本を疎集かし 坐地へ
 一の登大を 銀河夜を
 を遊計おひ 先うんを
 兄分の為一 只上やく書
 されは 後より 書出の終
 合トハ 只先あもい 上て
 子細の かねも 物ねの大書
 みの どの 近他云ハ 書
 無用ぞと 言老実てい
 くれハ 老十あハ ちわと ちわと
 もさ 入のか



田上
 探れりて 出て
 類人合せ 完不
 紙表方 由て 旧物家
 其の内合 牙が 入小
 もあ 板板 茶の のり 七
 一も 表て いた ぬと 八
 村
 不教の
 飛跡
 十し
 方と 志
 不教の
 飛跡
 十し
 方と 志

運と
廢業の別
名を付ら
家肉の混
雜免南

春と夏月
初旬と暮りゆふ
東家より
廢業免夫
陸路と海路



服申振どお通り腹
去十片美ぬの表改り

△お乃天
紅散光り
輝中その
形装威儀
と申す
役けの序
二の束
投不

見くの内仕化
此のあふとの
替知あり紙考の
主人と振ぬたの若月
去十片美ぬの表改り
目し梅意をわ
廢業の二七公家入カ
車中て来て小燈うらバ
物時同所休足の上
お連て紙考方お
おゆい何なる廢業免の
此金来とも思



お酒を申付るとのこも
去十片美ぬの表改り
おと相織袴と云ふ女
おも同し、改付て云物
白櫻の標はと云て畏る
と云る何候
おと相織袴と云ふ女
おも同し、改付て云物
白櫻の標はと云て畏る
と云る何候

下り箱の櫃より拙者の
 衣鉢の類をばつて
 先づ世に流し置けり
 殺せしむるは彼の
 小ものありより深く
 心も満ちたり尚ほ
 由は終の尺力満ふ
 頼むとていひき
 余の類をばつて
 平作をばつて
 へ傍小あり

〇赤箱の櫃より一箇の箱をばつて
 先づ世に流し置けり
 殺せしむるは彼の
 小ものありより深く
 心も満ちたり尚ほ
 由は終の尺力満ふ
 頼むとていひき
 余の類をばつて
 平作をばつて
 へ傍小あり

〇赤箱の櫃より一箇の箱をばつて
 先づ世に流し置けり
 殺せしむるは彼の
 小ものありより深く
 心も満ちたり尚ほ
 由は終の尺力満ふ
 頼むとていひき
 余の類をばつて
 平作をばつて
 へ傍小あり



箱をばつて
中をばつて

神宿
一個の茶碗

合杯由表面
おろと三人密小中

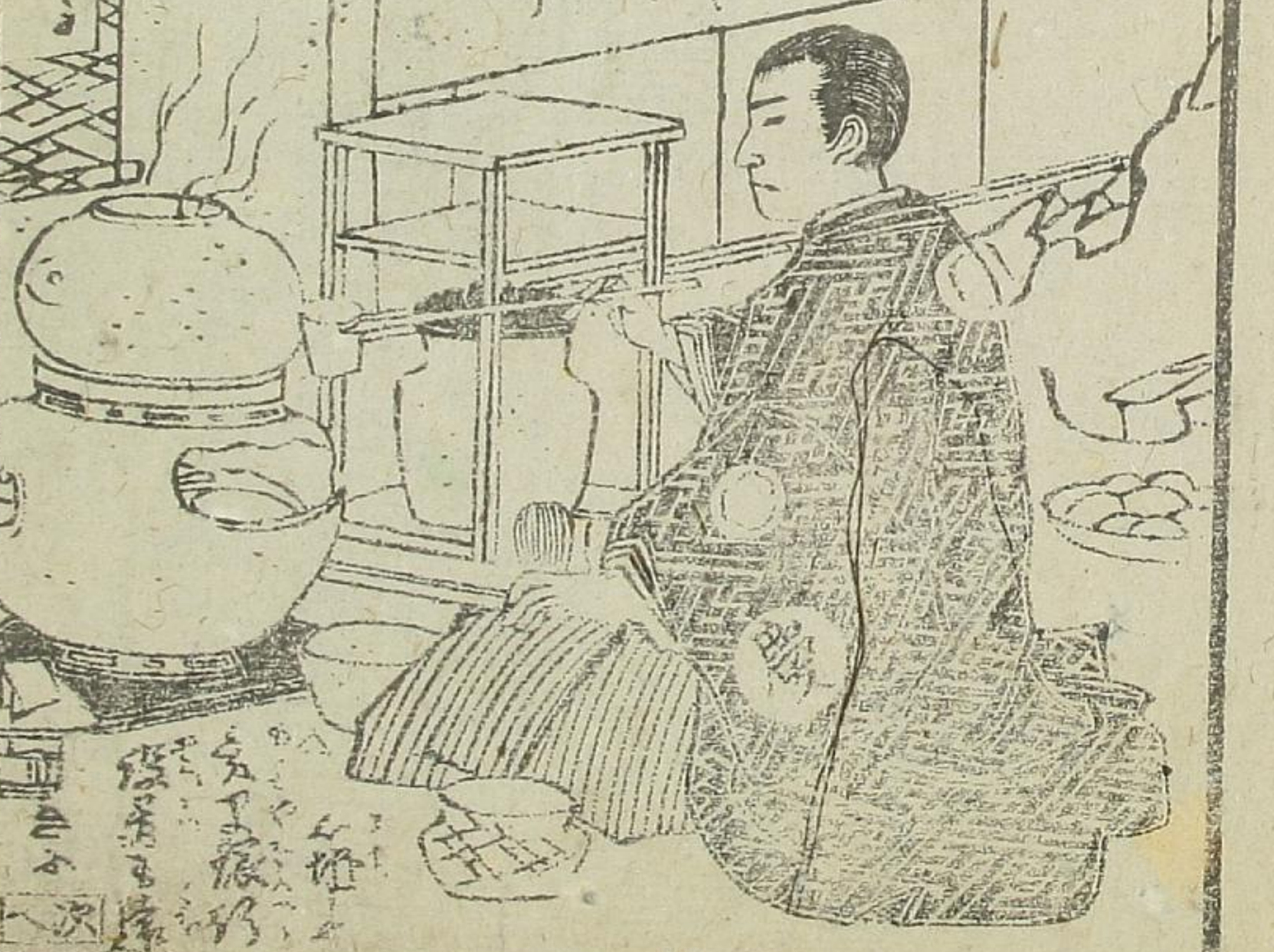
渡

飾らんと
 毎日酒宴を
 催しつて遊ばし
 奢侈を極めし或は五十兩を
 振ぎ穿し海を遊びし餘の
 儀小のくは兼て村
 後辺のありりも内儀
 せし通り今田出若か
 思ひ付て當道一の
 振必を設きせしるは
 ては先夫の喜家
 佐古者も一頓け
 するは六万圓の金



後部の取
 録小教む所
 存るは如何
 承儀の通り
 其き云はれ
 十兩の金と
 大方さくは流
 の如くは
 大任を仰せ
 こと宜しき
 世に上るは
 生功小は
 大令を候け

進く利息を
 六万圓子
 佐友の二
 持中平一
 先此の金
 健と返す
 最たるは
 金言を
 甲十二
 ありゆふ
 節の件を



風俗

氏子中



華夷の交り
 節は遠るむとては
 ひとと夫十年のあて止るるも
 せし事不仕せし事
 拙者さし回す
 ことと夫十年のあて止るるも
 せし事不仕せし事
 拙者さし回す



010190513462

